

野

居

鷹

卷

五

五

13
3038
5



へ13 特
3038
5

由利稚野居鷹鳥卷之五

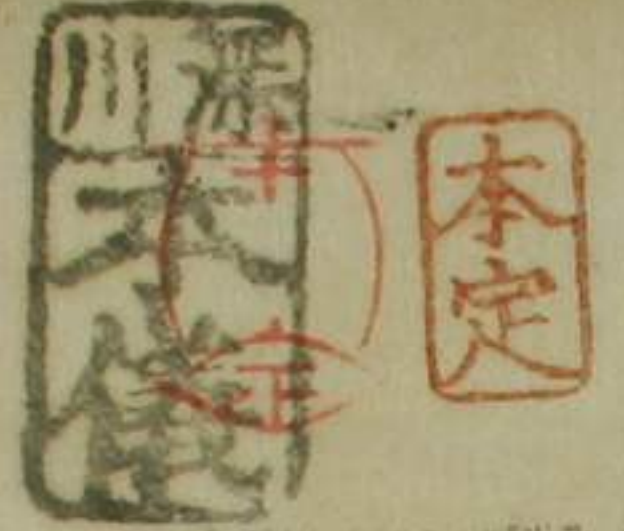
万亭 叟馬 戲編



○ 由利稚應需長者見弓勢

さても差羽六郎只先と承久二年の秋乱軍の中討死し
ふひ今ハ黄泉の鬼となりまひしとのおりい果し主君由利
稚ふめぐり合大さこみし後さび巳とく隠し家へ供や若君
御對面ありければ親子も小手次とりふひ御敵ハ浅から
ば中あも北の方け横死伏衣巨則が忠義の始末曲
とてし召すあにつけても煩惱則菩提の教もかた附ふ

由利稚卷之五



さうの大將通臣が亡くした勢いも失ふへ。大郎もよく
かせども此上をいへとえお縁九つのも後見ハ。六郎只先
のつと長く佛の道に入らぬ風情なりければ。六郎が
ひそく尾懸の長者もあめし合せ。兩人由利稚の御前
ほり。尾懸かけに誠や君養由が術を傳へ記昌が藝も
よふこと。父傳てての身移く世の人のちれそとあり
の身ほしてかく中は憚りなれしもあねど。日頃訓
みよとがふ。御弓勢のほどを一度拜しとりのた
言は兼の下より。差羽大郎一張の弓一手の矢。御前
置是ハ

この頃若君御武運長又逆臣退治心願の爲當國妙義山の
主前お納めをいんと某かよく用意しおと鉄の弓亦
山鳥の羽が以て剥くれ征矢筈も常お越え餘り延く
が君がたて誰う此弓が曳人のめれぞ。とも覚え
長者が弓にほうせ。一矢遊なれしとやければ。由利稚
み辞とれ松か。我ひはしく沖の小嶋のうらみ捨られ腕
ほりて力盡されが射藝のほどをいとなし。去なが
所いさむさたふめと。何とどう的と定めん。みめと
と。只先か。とよりて。御らんぬえ違う向の岨お立。古木の

由利谷之五



由利谷山塞
鉄ウレ
弾く磐石
と貴く



第三の世に小高と節のうえの地的なはし多とす。あを由利
稚ら上り袍の袖お肌めだ。はも鍛えし鉄の弓忘る。小
曳をけり。切く放せむのやほむ。一町のまりの溪川とてえ。天
坪たがらぶ。大木のひと震ゆれれとてえありしが。ほのさと折る
餘れ矢先巖やぐらひて立ちり。は眼ぞんなんども愚うおも。
ゆり合かごりは感禱の声ぞ。止ゆるむ。わが冷ほ。れはう勢
と舌震ひみぞろりけ。由利稚袍の袖搔繕ひ。我々幸ひり
尾端の主の晴めて再度汝もめ。り達も。北の方その外のり
ごものえお。此山中あて非業の死なむ。し事いと惜やとばかり

ららるるれもひめを。今語りて由利稚の射通し。よれ跡ありと。
連峯崔嵬として日の光を漏狭間。りらの里人ハヤ傳令。
由利稚大神と。りて尊とみ奉。世ふおを後。了武威の経
み語りて。嬰児られが爲に泣ぐ。は唐土江南の俗。遼來を
誦と。の類ひ形。れし。差羽六郎ハ勇氣凜々とし。進みりて。
長松の下か。る。清風のり名將の陳おの。げ。ら弱卒。り
り。大将か。れ上か。は即時。小逆臣。討て。又家の餘。く。は。神
んこと。頸。め。ぐ。と。る。の。小勢。あり。と。せ。む。其日。こ。も。
瓜。結。ひ。と。れ。者。とも。皆。一騎。當。千。なり。又。當。國。と。か。めて。我。ら。と。

とてい奉れ輩おやけとば調どのを一刻も中々打とらん
安られ人くと勇み立と尾總の長者にワレハ我々の討畧あり
別府兄弟君孤獨のうらみ捨今又若君いまはねとも未
其又家以奪りて猶表少は若君の御行跡以尋ひて
りゆ成名とすれ者ハ鎌倉の心下知且又世の人以成とぶ
なり。今録く殿より別府由利の家と給られ上使あり
て羽列下りて別府定めて境以離と遠く迎へて
去る所以捕らば于戈以邦内以動かすこと一舉にして
その謀計はこれと辨舌懸河のぶく理節不當りたるは各

此の義小従ひ由利稚どの上使とらつた。肩輿に召られ大野
勇士左右以圍み。六郎只先とられ先づらて庄司起縄が御
むらひお出る邊り埋伏し。鬼おもかきも討りてとほ
計がめづりしるれ。

○ 滅亡別府由利稚安居舊城

其ころの世に説として由利の家の老長おんは関
野膏の家おた居ぬ事とせられ。別府庄司が悪行を
浅しおんといふも中くなり。緑丸の行跡たぐひ
いづれのみして其實と己とが公腹の者なり。討探し



鳥のせまが竊み失ひをばなれど死すこのほどを怖し居捨多
館若君降りしりみり今ぞ打明おえ事ハ非常の侍人死し似
たりとて自ら移り居る堀が深し槽が揚棟梁高く造り
そよよの修理はくそ奇麗壯觀は遅はるせかどもま
かた園の中非情の柙木といふも花とおのぼりから露も泣れ
粧ひはそえ砌の松は風は吟ぞれも声は春をふみおやえなれ
庄司鬱々として樂しむと此館より一里のあり隔てぬ
たかしの別業はかほえ庭より奇樹怪石は美景はほくろ
かとも年も暮てたら帰れ春の光も氷解ゆく氷の音

とくと告げ鶯の声も此邊にいと鄙びて人帰れ四方の
梢も春やと花やほそと詠げん言の葉は暮れしものほど
扱まて去年の冬人死洛ののせ白拍子數多呼下しとれ
中舟磯の禪師が流しは酌しは柴といわれ女も庄司ら
はぬし常に禪師同ぢりし句は渡とも己まが宿所は
るも忘れ只此別荘のみぞありけりあうけよかのかた柴木が
のりこは蟬始とれ両鬢宛轉とれ双蛾言葉もも速か
筆もほけし難と姿形れ上も近らる世もてくやも早
歌といふ物成唱の付とめをひて纏頭は費その類ひる



電の風聞畧るれはつれとす。代々の舊家新絶の事。執權も便なれ事小多し。鎌倉殿へ御取しあつてこの家の舊臣別府庄司元押由利家の領地安堵いささか。御教書下しおられ上使近々羽州下向の段々。海江の處々。越え越えりければ庄司大に。よめこひ。厚く使者とりておし。領地の謀役と言ひつり。道成ひ。に格取渡。城に離れて。飯屋を。此所に出く上使近々。迎へ。され。仕度。と。お。け。れ。候。也。上使。下向の道。月。お。た。れ。方。候。の。面。々。と。此所の山が。この里。す。て。先。驅。の。の。と。く。く。く。く。く。

註進引も。さ。さ。さ。さ。さ。さ。御先。追。の。声。花。は。く。御。轡。已。お。近。付。を。庄司元押地上。お。膝。行。して。迎。へ。さ。れ。上。使。の。肩。輿。舒。小。昇。り。御。簾。さ。つ。と。上。り。如何。小。元。押。汝。控。れ。と。え。さ。さ。り。や。と。宣。ふ。声。小。仰。さ。さ。れ。ば。如何。如何。小。先。年。沖。の。小。嶋。小。難。面。を。て。ほ。い。せ。し。主。君。由。利。維。の。の。れ。ば。さ。さ。の。庄。司。大。に。お。狼。損。顔。色。忽。ち。土。の。如。く。ま。り。し。が。え。より。大。膽。不。敵。の。元。押。切。上。死。と。や。さ。ひ。定。め。り。ん。太。か。が。後。人。と。す。れ。所。小。第。二。郎。起。繩。を。た。り。頃。效。怪。の。鳥。不。乃。が。ふ。か。さ。れ。後。を。身。拵。か。る。り。ぬ。白。癡。と。な。り。し。お。より。一。下。間。が。れ。所。小。押。込。め。お。じ。が。い。つ。の。間。あ。ら。は。後。出。さん。この



由利権
帰有て
別有兄弟
誅一
伏在小達



とと返へありの。後より兄庄司が腕首扱んど些ともえたるか
せ次元押いらつと何奴ぞ推参なりとゆり放せど故とばこそ
兄弟互ひは捨めふ所は大勢一度ふ折めさゆり。終は縄をとり
あり。其後二郎の大音揚おのが悪事口走ア大勢の倒
虚空は扱え血と眼鼻よりほとどして死おと死おとれ
天命と言ふがら不思議ありけれ次身形り別府兄身も從
える者ども此のりさは死えそ中く戦ふ景色もななく右往左
往ふ逃らしを適じざるじと味方の大勢八方ふも分をばし
ことごとく生捕と取りけれうち一人の女と引連あり。此か山

陰よりあつえ居ゆえり。倭人別府めが餘類ありやと存
召連ゆと御前なるか引居けれを由利維の熟々ゆえ
お正しく上野國の山中めて巨則の冠者が爲小公又落よ
とけしと笑。伏衣あつめりけしは。いりみ伏衣あつめり最
とけしと笑。伏衣あつめりけしは。いりみ伏衣あつめり最
君もては。此世はなつかえ居れるものいふか。はよと宣
声も伏衣と顔とあつ。由利維との死んで大勢は驚き。あつ
人声さつて。例の別府めが焼野の狩と察せしゆえ。見処めら
て。悪かりおんこぢひ。陰とんとせし。大勢の士卒も連ら

了るれ安未不相遠の君の御坐本年の冬上野の國は山
おと谷へ落入北の方乃御供ふつれ所ありつや觀世
の利益を請ふ一人の異人逢ふ不討死さしふと而已
一に主人不當年花盛の節より再度入り逢ふ人の教
カ押北の方乃御行結成尋ひ異人の教とやめづと是
やわりのゆとや上り始めて北の方乃御落命とすむと
やれかお形さ先づ河物とるさなる伏衣はむけれた往不谷
ふ異人より終りし由利の家重代の名劍といそふ隠
葉色より取し大将不捧けをりわりし次身成のを

由利推し不取御覽おれ不中心切先一頁の曇りなく龍泉
太阿の故事もて多しとて光の中不影のごとく焼及の
ごらく鷹の形とさめけり由利推し伏衣が物語はじめ終り
るる合せん扱と此劍漢土より傳えありし酒の君乃
愛しむに鷹の仮不現下折られ劍成全ふせ
物るらんご影とさめし所縁成その佐野守の太刀と号
ふひり實や春雷一度動くと此の蠶虫萌蘇をれらひ
別府見寄不遠ざりられ山野不為成道と忠義の面
君此所不在とははすはく。是所かことより御迎ひに



由利権國卷之五



馳集あり由利維との目出と入城形一終ひけふ六郎只
と別府見寄が家次所形し一味連判の一巻と奪ひ取
る餘類とぐく罪せんへ仁慈の道小あぐと天乙の罪と
弛とれよるひ是は焼きて庄司元押が首切く梟木
さし。賞を重し罰を輕く別府が櫻りおかせし誑
平一れば由利維その手はつて是我家の管鮑なりと
く稱嘆めとつん願うは忠臣の種を残すとととと六郎
と定はれれ妻かたを幸ひふ伏衣を媒しあひ。又巨則の冠
者か忠と此のつれとあひ尾總の長者かゆりの者と長者

ふを請その家次新とふ建と祀成をやしあつて連臣亡びと
再度帰國ありし趣と鎌倉へ訴へるひければ鎌倉殿よりも
御歡ひの御書下り隣國はても其徳ふかづけり。その後
尾総の長者とあひの引出お給り長者は睦みと上
帰國なりけれそ目出度けれ。

由利維野居鷹巻之五畢

作者

萬亭叟馬

画工

葛飾北齋

校正

節亭琴驢

備書

石原駒知道

刻工

高橋待人

○水蘭堂戊辰新鵜目録

三七全傳南柯夢

曲亭上人著
北齋主人画

全六冊

書

京都寺町通佛光寺

河内屋藤四郎

江戸日本橋通壹丁目

須原屋茂兵衛

同 貳丁目

山城屋佐兵衛

同 貳丁目

須原屋新兵衛

同本石町十軒店

英 大助

同淺草茅町貳丁目

須原屋伊八

同芝神明前

岡田屋嘉七

大阪心齋橋通勞勞町

河内屋茂兵衛

同心脊搦通本町角

河内屋藤兵衛

林

